

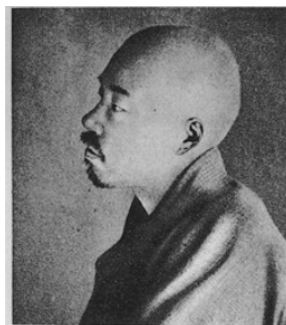
31 日仏交流俳句コンクール (2021 年 2 月 4 日)

1 月 29 日、パリ日本文化会館が主催した日仏交流俳句コンクールの審査結果が発表されました。このコンクールは、昨年発生した新型コロナウイルスの影響で世界中の人が困難に立ち向かう中、喜びや悲しみを俳句で表現して励ましあうことを目的として行われました。30 以上の国から約 1700 の作品の応募がありました。審査員賞と一般投票で選ばれた「みんなの一句」には、「会いたいな いつ会える



かな 春の風」(仏訳: J' aime te voir / Quand pourra-t-on se revoir ? / Le vent printanier) (日本語部門小学生以下 渡辺紗生) や《 Le Printemps s' éveille / J' imagine les sourires / derrière les masques 》(和訳: 春めいて マスクの奥の 微笑かな) (フランス語部門一般 オルトウルスキ) といった、コロナ禍ならではの作品があります。(<https://haiku.mcjp.fr/jp/>)

俳句は、フランス語で Haïku として定着していますので、ご存じの方も多いと思います。俳句は、5・7・5 (計 17 音) の韻律を持ち、世界で最も短い定型詩と言われます。日本の俳句は、17 音の中に「季語」を含めて、少ない文字数で感情を表現して完結させるために「切れ字」と言われる言葉(「や」「かな」「けり」等)を使うのが一般的です。日本では、古代から 5・7・5・7・7 (計 31 音) の韻律を持つ和歌が作られていました。その後、5・7・5 (発句) と 7・7 (脇句) を複数の人が交互に詠んで楽しむ連歌が広まり、この発句が独立して俳句に発展していきました。有名な俳人としては、江戸時代の松尾芭蕉、与謝蕪村や小林一茶、明治時代の正岡子規や高浜虚子などが挙げられます。



quand je mange un kaki
la cloche sonne
le temple houryu-ji

柿食べば
鐘が鳴るなり
法隆寺

MASAOKA Shiki 正岡子規 (1867-1902)

現在では俳句は世界中に広まり、日本語以外の言語で多くの俳句が作られています。俳句を作るには決まり事が多くて難しい印象を持っていましたが、フランス語の俳句は、細かなルールにこだわらずに、3 行でリズム良く簡潔に感情や情景を表すことを重んじています。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

これまで俳句に触れる機会がなかった方も、あまり難しく考えずに、心に浮かんだことを俳句で表現してみてもいいのではないでしょうか。